

## 【原著】

ASE を取り入れたキャンプ活動がサッカーチームの雰囲気及ぼす影響  
The Effect of Camping including ASE Program on Atmosphere of the Soccer Team

福富 優 FUKUTOMI Yu  
国立立山青少年自然の家

平野 吉直 HIRANO Yoshinao  
信州大学

## キーワード

ASE、キャンプ、サッカーチーム、雰囲気

## 要旨

本研究は、ASE を取り入れたキャンプ活動を体験したサッカーチームの雰囲気が、キャンプ前後でどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。

中学生のサッカーチームを対象に、ASE を取り入れたキャンプ活動を実施し、筆者が作成した「チームの雰囲気尺度」を用いて、キャンプ前後のチームの雰囲気を測定した結果、キャンプ前とキャンプ終了1週間後の比較において、尺度得点に有意な向上が認められ、一部因子においては、その向上がキャンプ終了1カ月後まで持続された。

これらの向上は、選手たちのふりかえりの記述を含め総括すると、キャンプ中に実施したASEによる成果が大きいと考えられる。また、キャンプ終了後においてもコーチ・選手たちがキャンプ中に得た学びや気づきを大切に、それをベースとしたトレーニングを心掛けたことによって、本研究で実施したキャンプの成果がキャンプ終了1カ月後まで維持されていたと推察できる。

## I. 緒言

## 1. 研究の目的

近年、チームスポーツにおけるトレーニングの一環として、野外教育活動を取り入れる動向がみられる。チームスポーツの中でも、とりわけサッカーチームにおいて野外教育活動が積極的に導入されており、1970年代に筑波大学のサッカー部がASE (Action Socialization Experience: 社会性を育成するための活動体験) を取り入れたプログラムを実施したことを皮切りに、2000年以降はJリーグのトップチームにおいても複数チームがASEを主とした野外教育活動を導入している<sup>(1)</sup>。これらトップ選手に対して実施する野外教育活動の主な目的には、信頼関係の構築・コミュニケーションスキルの向上などのチームビルディングや、結果至上主義によって過剰に張りつめている心身のリフレッシュなどが挙げられる。

また、ジュニア、ジュニアユースなどの育成世代のカテゴリーを対象に、日常生活では味わうことのできない自然体験や社会体験を通じて、自主性や協調性、創造性などを高め、豊かな人間性を育む場を提供することを目的に掲げた野外教育活動の導入も盛んに行われるようになってきた<sup>(2)</sup>。

そのほか、雰囲気や一体感の向上を目的に野外教育活動を取り入れるチームも多々ある。2009年5月には、バンクーバーオリンピックの候補選手を対象に、野外教育活動において頻繁に実施されるアイスブレイクゲームが実施された。この活動は、Team JAPANとして競技種目を越えた一体感を醸成することを目的として、日本キャンプ協会が日本オリンピック委員会から委託されたものである<sup>(3)</sup>。参加した選手からは、「アイスブレイクを体験したおかげで、オリンピック本番でも選手同士で自然と挨拶を交わすことができ、選手村などでも余計な気を遣うことなく生活をするのができた」という感想が聞かれた。選手が最大限のパフォーマンスを発揮するにあたって、過度な緊張やストレスを感じることは望ましい状態ではないことは言うまでもなく、その点からこのアイスブレイクゲームは非常に有意義な活動であったといえる。

近年、そういった野外教育活動を様々なスポーツに取り入れる傾向がみられていることに伴い、その効果の実証に関していくつかの報告がされている。

サッカーのチームワークに関する報告として、福富ら<sup>(1)(4)(5)</sup>は、オフ・ザ・ピッチ（サッカーに従事していない時間）での望ましい行動変容は、選手の自立や社会性の高まりを促し、チームワークの向上に資するものになるという考えのもと、ASEや野外炊事などを取り入れたキャンプ経験がサッカーのチームワークに及ぼす影響について明らかにしている。その結果、キャンプ経験によって、サッカー選手のオフ・ザ・ピッチでの行動は有意に良化され、その状態はキャンプ1ヵ月後まで維持され、その後の試合において安定した好成績を収めていることが明らかになり、チームワーク向上を目指す上でキャンプを実施することの有用性を示唆している。その考察として福富は、「安定した成績は、キャンプ経験によって直接的に生み出されたとは考えにくく、キャンプを通じて選手たちに心理的な変化が生じ、雰囲気や人間関係が改善されるプロセスを経たのちの産物であると考えられる」と述べている。

学校体育におけるチームスポーツの雰囲気に関する報告もある。金子は、学校体育のバスケットボールの授業において、児童相互が積極的にコミュニケーションを取り合い、励ましの声・称賛の声を増やし、チーム内の雰囲気をより良くすることによって、技能の低い児童が積極的にボールに触れるようになることを明らかにした。さらには、試合中における児童の触球数の増加に伴い、技能の向上までも確認されたとしている<sup>(6)</sup>。

チームスポーツにおいてチームワークや雰囲気、一体感といったものが結果に直結することはもちろんのこと、練習などの生産性に及ぼす影響の大きさは前述のとおりである。これらチームワークや雰囲気といったものを高めるための手法のひとつとしてASEなどの野外教育活動が認められつつある一方で、野外教育活動がチームスポーツに及ぼす効果の実証に至る調査・研究は多くない。

このような現状を踏まえ、本研究では、ASEを取り入れたキャンプ活動を体験したサッカーチームの雰囲気が、キャンプ前後でどのように変化するかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 「ASE」の定義

ASEとは「社会性を育成するための活動体験」と訳されるが、実際に様々な団体がASEという名前を用いて活動を展開する際、その内容は多種多様であり、それが示す具体的な活動内容や方法論などは明確に定義されていない。鶴川<sup>(3)</sup>は、ASEについて「固定したグループが個人では解決できない精神的・身体的課題に対し、メンバーそれぞれの意見や身体条件などを活用しながら課題の達成を目指し、そのプロセスで、必然的に衝突や協力、他者の尊重や自己・グループ内での葛藤を経験するようにデザインされたプログラム」であると述べている。

また、過去の研究から、キャンプ活動における自然体験や生活体験を通して参加者の協調性や社会性を向上させる可能性があることについて、多数の報告がされている。

本研究の目的は、ASEを取り入れたキャンプ活動を体験したサッカーチームの雰囲気の変容を明らかにすることであり、雰囲気の変容をもたらす要因として、ASEとキャンプ活動の2つが想定される。したがって、ASEという用語について、キャンプ活動とは異なる明確な特性を定義する必要がある。

そこで本研究では、鶴川<sup>(3)</sup>の見解をもとにASEを「一般的なキャンプ活動では必ず生起するとはいえない必然性に欠ける衝突や協力、他者の尊重や自己・グループ内での葛藤などを、必然的に経験することができるよう意図的・積極的にデザインされたプログラム」と定義する。

## II. 方法

本研究は、チームの雰囲気の変化をとらえることが目的であり、チームの雰囲気という抽象的かつ数値化しにくい事象を、客観的に測ることができる尺度の作成が求められた。そのため、まず、チームの雰囲気を測ることができる尺度を作成し、その尺度を用いて、ASEを取り入れたキャンプ活動を体験したサッカーチームの雰囲気がどのように変化したのかを調査していった。

### 1. チームの雰囲気を測ることができる尺度の作成

#### (1) 予備尺度の作成

チームスポーツにおいて良い雰囲気ของทีมとは具体的にどのようなチームであるかを明らかにするために、チームの良い雰囲気を構成する要素の収集を目的とした事前調査を行った。

調査対象者は、日頃からサッカーの指導に携わっている中学校およびクラブチームの指導者19名、大学および専門学校のサッカー部員79名、サッカーと同じくチームスポーツとしての特性を持つ大学バスケットボール部員16名の計114名で、調査対象者に「雰囲気が良いと感じるチームに見られるチームまたは選手個人の行動や態度」について、できる限り具体的な表現で10項目程度を自由記述してもらった。

次に、収集した項目の中から、「チームの雰囲気尺度」の具体的な指標となる項目を精選する必要があるため、抽象的な表現を含む項目を削除したり、複数の意味を含む項目をそれぞれ分割したりしながら、近似した表現は1つにまとめ、多くの調査対象者が共通して回答した表現を中心に拾い上げ、50項目程度を目安に精選した。これらの手続きを経て、

チームの良い雰囲気を構成する要素を精選し、これを予備尺度とした。

## (2) 因子分析

最終的な「チームの雰囲気尺度」の項目を選定し、かつ精選した項目がどのような下位因子によって構成されているのかを探るために、2010年5月に、中学校サッカー部およびサッカーのクラブチームに所属する中学生111名を対象として、予備尺度を用いた予備調査を行った。

得られたデータをもとに、因子分析、信頼性の検討などを行い、最終的な「チームの雰囲気尺度」を作成した。統計処理には、SPSS 15.0J for Windowsを用いた。

## 2. ASEを取り入れたキャンプ活動におけるサッカーチームの雰囲気の調査

### (1) 調査対象者

長野県に拠点を置くサッカーのクラブチーム（以下、チームA）に所属する中学生の男子10名と、栃木県に拠点を置くサッカーのクラブチーム（以下、チームB）に所属する中学生男子13名の計23名を対象とした。なお、チームAチームBともにクラブチームであるため中学校部活のチームとは異なり、日頃から生活を共にするような経験はほとんどなく、サッカーをする時のみ顔を合わせるといった特徴がある。

### (2) キャンプの概要

本調査で対象としたキャンプは、チームA、チームBそれぞれ別々に実施された（以下、それぞれキャンプA、キャンプB）。キャンプAは、2010年6月5日～6日にかけて1泊2日で実施し、キャンプBは、2011年2月11日～13日にかけて2泊3日で実施した。

キャンプA、キャンプBともに、国立妙高青少年自然の家で実施し、キャンプの運営は野外教育活動を専門としているNPO法人のスタッフや野外教育を専攻している大学院の学生および筆者で行った。事前にスタッフ間でミーティングや下見を行い、キャンプの目的や参加する選手たちとの関わり方について、十分な確認を行った。また、各キャンプにはチームのコーチが同行し、一部キャンプの運営にも関わりながら、選手たちの活動の様子を観察した。

各キャンプのプログラムは、表1、表2のとおりである。表1、表2において「」で示した活動が、本研究で定義したASEにあたる。キャンプAは春、キャンプBは冬の積雪期であり、フィールド状況は大きく異なるが、キャンプの内容は、野外炊事やビバークに加え、キャンプAキャンプBともにASEを積極的に取り入れており、チームの強化を図ることを目的としていた。ASEでは、「ラインナップ」、「ブラインドウォーク」、「クモの巣」、「ヘリウムフープ」、「トラストフォール」など、ネーミングに一定の認知度がある活動をはじめ、その他チームの実態に応じたオリジナルの活動を用意した。

### (3) 調査内容および方法

チームAおよびチームBの雰囲気が、キャンプを通じてどのような変化をするのかを明らかにするために、調査対象者に対して、筆者が作成した「チームの雰囲気尺度」を用いたアンケート調査を、キャンプ前（PRE）・キャンプ終了1週間後（POST1）・キャンプ終了1ヵ月後（POST2）の計3回実施した。「チームの雰囲気尺度」の回答は、「あてはまらない」、「少しあてはまる」、「わりとあてはまる」、「かなりあてはまる」、「きわめてあてはまる」の5段階評定で求めた。なお、チームAチームBともに、キャンプ後からPOST1の間

表1 キャンプAプログラム

	午前	午後	夜
1日目	キャンプの目標設定	「大脱走」 「ブラインドウォーク」 「ヘリウムフープ」	「グループワーク (コミュニケーションゲーム)」
2日目	「ラインナップ」 「ジャイアントシーソー」 「クモの巣」 野外炊事	ふりかえり	

表2 キャンプBプログラム

	午前	午後	夜
1日目		雪中泊(ビパーク)準備	「グループワーク (コミュニケーションゲーム)」 ビパーク
2日目	「ブラインドウォーク」	「食材争奪ゲーム」	「グループワーク (翌日野外炊事の話し合い)」 ビパーク
3日目	「トラストフォール」 野外炊事	ふりかえり	

にはトレーニングおよびトレーニングマッチが組まれていた。

#### (4) 分析方法

PRE、POST1、POST2の得点を、分散分析およびFreidman検定を用いて比較した。その後、有意差が認められたものに対してBonferroni法の多重比較を用いて比較し、キャンプ中の選手たちの様子やキャンプ中に選手が残したふりかえりの記述、キャンプ後の各チームのトレーニングやトレーニングマッチの様子と関連させながら、チームの雰囲気の変容について検討した。統計処理には、SPSS 15.0J for Windowsを用いた。

### III. 結果

#### 1. チームの雰囲気尺度の作成

##### (1) 予備尺度の作成

「チームの雰囲気尺度」作成のために、チームスポーツにおける良い雰囲気ของทีมとはどのようなチームであるのかを明らかにする必要性が生じた。そのため、事前調査として、サッカーの指導に携わっている中学校およびクラブチームの指導者、大学および専門学校のサッカー部員、サッカーと同じくチームスポーツとしての特性を持つ大学バスケットボール部員の計114名を対象として、「雰囲気が良いと感じるチームに見られるチームまたは選手個人の行動や態度」について、具体的な表現で10項目程度の記入を依頼した。その結果、893の非常に幅広い項目が収集できた。

収集した 893 項目を最終的に 50 項目程度に集約するために、項目の絞り込みを行った。最初に、「チームが明るい」などの抽象的な表現の項目、「大きな声が出せる」などの状況が不明瞭な表現の項目を削除し、「盛り上げる、励ます、注意するなどの声が出ると出る」というような複数の意味を含む項目は、「盛り上げる声が出ると出る」、「励ます声が出ると出る」、「注意する声が出ると出る」のように分割した。次に、最終的にサッカーチームを対象に用いる尺度であることや中学生を対象に用いる尺度であることを考慮し、「良いプレーがあったら、その都度ハイタッチをする」のようなバスケットボール特有の行動が含まれている項目や、「個々が目標に準じた努力を惜しまない」のような中学生にとって理解しにくい表現が含まれている項目などを削除・修正した。さらに、「目標に向かってチームが1つになっている」と「1つの目標に向かってチームが団結している」のように、近似した表現は1つに統合した。多くの調査対象者が共通して回答した表現を中心に拾い上げ、44項目に絞り込んだ。

絞り込んだ 44 項目について、実際に中学生にとって理解可能な表現であるかを検討するために、公立中学校の1年生5名を対象に、筆者がインタビュー調査を行った。理解しにくい表現および言葉、読めない漢字について調査し、その結果をもとに表現および言葉を改め、漢字にはふりがなを付記した。

これらの手続きを経て、44項目からなる「チームの良い雰囲気を構成する要素」を精選し、これを予備尺度とした。

## (2) 因子分析等

前項までの手続きで作成した予備尺度がどのような下位因子によって構成されているのかを探り、かつ最終的に「チームの雰囲気尺度」として用いる項目を選定する必要があるため、中学校サッカー部およびサッカーのクラブチームに所属する中学生 111 名を対象に、作成した予備尺度を用いた予備調査を実施した。

回答は、「あてはまらない」…1点、「少しあてはまる」…2点、「わりとあてはまる」…3点、「かなりあてはまる」…4点、「きわめてあてはまる」…5点と得点化した。

得られたデータをもとに、平均点・標準偏差を算出し、天井効果・フロア効果が認められた3項目を削除した。

残った 41 項目に対して、因子分析を行った。因子抽出法は主因子法、因子軸回転はプロマックス回転を用いた。複数の因子に対して高い因子負荷を示した項目およびすべての因子に対して因子負荷量 0.35 未満を示した項目を削除しながら因子分析を繰り返したところ、4つの因子が抽出された(表3)。

次に、それぞれ抽出された因子に対して、命名を行った。第1因子は、「試合中、控えの選手からの応援が多い」、「良いところも悪いところも、互いに指摘し合うことができる」などの項目から構成されていることから、「言語的コミュニケーション」因子と命名した。第2因子は、「1人1人が失敗をおそれずにチャレンジする」、「全員が自分の意見、考えを表示することができる」などの項目から構成されていることから、「信頼関係」因子と命名した。第3因子は、「集合や移動など、次への行動がテキパキしている」、「誰に対しても気持ちよいあいさつができる」などの項目から構成されていることから、「チーム規範行動」因子と命名した。第4因子は、「1人1人が自分勝手な行動をしない」、「目標を達成するためであれば、いくらでも努力できる」などの項目から構成されていることから、「目的達成」

因子と命名した。

表3 「チームの雰囲気尺度」因子分析結果

	F1	F2	F3	F4
<b>第1因子:言語的コミュニケーション (<math>\alpha=.73</math>)</b>				
25 試合中、控えの選手からの応援が多い	<b>.76</b>	-.03	.04	-.16
1 ゴールが決まったときに、全員で喜ぶ	<b>.68</b>	.10	-.31	.05
36 良いところも悪いところも、互いに伝え合うことができる	<b>.54</b>	.04	.05	.28
3 試合中や練習中、常に声が飛び交っている	<b>.52</b>	.02	-.00	-.01
44 チームの課題について全員で納得するまで話し合い、解決していくことができる	<b>.48</b>	-.18	.28	.32
<b>第2因子:信頼関係 (<math>\alpha=.78</math>)</b>				
15 1人1人が失敗をおそれずにチャレンジする	-.22	<b>.73</b>	.05	.22
11 1人1人がチームの仲間に認めてもらえるものを持っている	.09	<b>.68</b>	-.16	-.09
14 互いに仲間の長所、短所を理解している	.24	<b>.58</b>	-.13	.05
13 全員が自分の意見、考えを表示することができる	-.11	<b>.57</b>	.21	.13
27 ミスに対して、周りの人がサポート・カバーすることができる	.21	<b>.45</b>	.12	-.11
<b>第3因子:チーム規範行動 (<math>\alpha=.78</math>)</b>				
26 集合や移動など、次への行動がテキパキしている	.27	.23	<b>.73</b>	-.28
23 誰に対しても気持ちよいあいさつができる	-.03	-.16	<b>.66</b>	.11
9 いつも荷物をきれいにまとめて置いてある	-.23	.09	<b>.60</b>	.02
39 用具の準備、片付けや管理を、全員でおこなっている	-.01	-.11	<b>.60</b>	.20
<b>第4因子:目的達成 (<math>\alpha=.77</math>)</b>				
43 1人1人が自分勝手な行動・プレーをしない	-.25	.03	.16	<b>.65</b>
22 目標を達成するためであれば、いくらでも努力できる	.10	-.02	.02	<b>.63</b>
37 最後まであきらめない	.19	.08	-.11	<b>.56</b>
35 つらいとき・苦しいときにも全員で助け合い、頑張ることができる	.24	.19	.05	<b>.35</b>
<b>因子間相関</b>				
	F1	.53	.42	.53
	F2		.52	.51
	F3			.50

内的整合性を確認するために、因子分析によって抽出された4つの因子に対して、 $\alpha$ 係数を算出した。その結果、 $\alpha$ 係数は.73~.78の値を示した。このことから、「チームの雰囲気尺度」の各因子内の項目は、ある程度の内的整合性があると判断した。

これらの手続きを経て、4因子18項目からなる「チームの雰囲気尺度」が作成された。

## 2. ASEを取り入れたキャンプ活動におけるサッカーチームの雰囲気の調査

正規性が確認できたPRE、POST1、POST2の「チームの雰囲気尺度」全体の合計得点および言語的コミュニケーション因子、信頼関係因子、チーム規範行動因子の3因子の得点の

変化について、調査時期を要因とした1要因の分散分析を、また正規性が確認できなかった目的達成因子の得点変化については同様にFreidman検定を行った。その結果は、表4のとおりである。合計得点 ( $F(2, 44) = 9.67, p < .001$ ) および言語的コミュニケーション因子 ( $F(2, 44) = 7.86, p < .01$ )、信頼関係因子 ( $F(2, 44) = 4.46, p < .05$ )、チーム規範行動因子 ( $F(2, 44) = 6.95, p < .01$ )、目的達成因子 ( $\chi^2(2) = 8.02, p < .05$ ) すべての下位因子において有意差が認められた。

表4 「チームの雰囲気尺度」の全体と下位因子の分散分析・Freidman検定結果

因子	PRE		POST1		POST2		F値または $\chi^2$ 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
言語的コミュニケーション	15.70	3.99	17.35	3.65	18.00	3.63	7.86 **
信頼関係	16.78	3.48	19.00	3.16	18.48	4.65	4.46 *
チーム規範行動	13.13	3.52	15.13	3.29	15.00	3.18	6.95 **
目的達成	13.74	2.12	15.61	3.01	15.09	3.81	8.02 *
全体	59.35	11.20	67.09	11.28	66.52	13.45	9.67 ***

\* $p < .05$     \*\* $p < .01$     \*\*\* $p < .001$

これらの結果を受け、多重比較を行った。全体の合計得点は、PRE-POST1において0.1%水準で、PRE-POST2において5%水準で有意な向上が認められた(図1)。言語的コミュニケーション因子は、PRE-POST1、PRE-POST2において5%水準で有意な向上が認められた(図2)。信頼関係因子は、PRE-POST1において1%水準で有意な向上が認められた(図3)。チーム規範行動因子は、PRE-POST1において0.1%水準で、PRE-POST2において5%水準で有意な向上が認められた(図4)。目的達成因子は、PRE-POST1において1%水準で有意な向上が認められた(図5)。

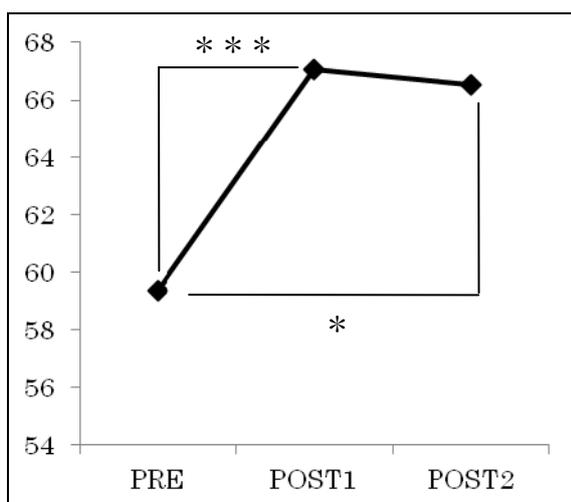


図1 全体の得点変化

\* $p < .05$     \*\*\* $p < .001$

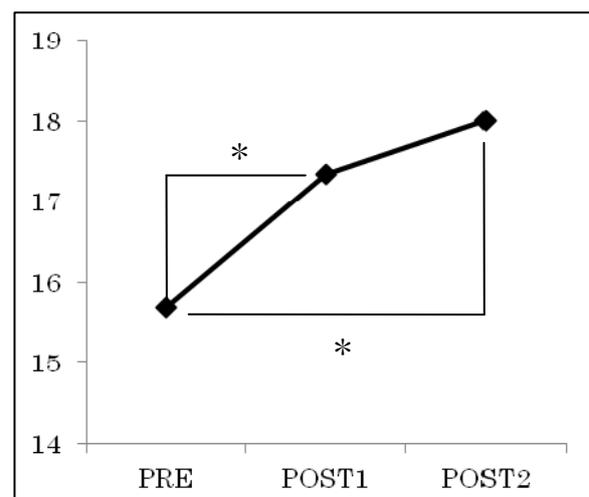


図2 言語的コミュニケーション因子の得点変化

\* $p < .05$

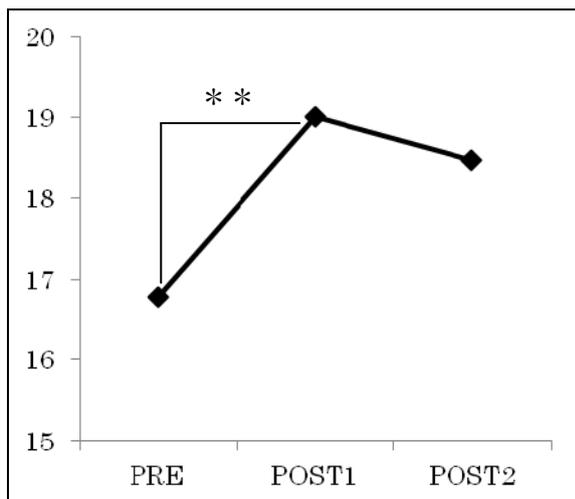


図3 信頼関係因子の得点変化

\*\*p<.01

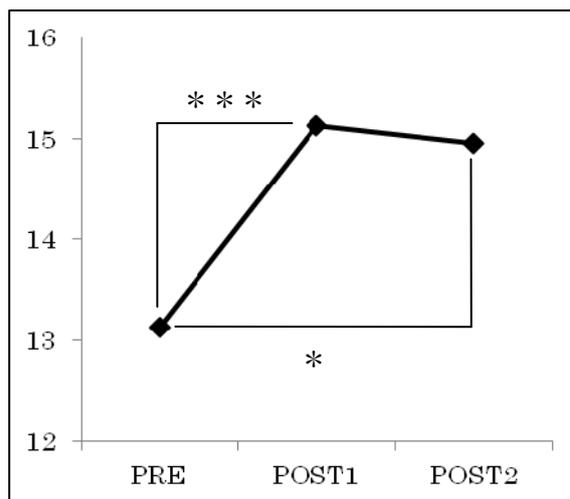


図4 チーム規範行動因子の得点変化

\*p<.05 \*\*\*p<.001

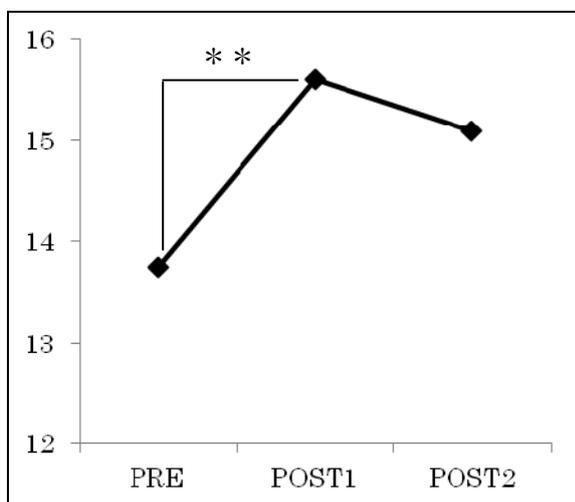


図5 目的達成因子の得点変化

\*\*p<.01

なお、2チーム分のデータを統合して分析するにあたり、一方のチームの得点結果がもう一方のチームの得点結果に影響を及ぼす可能性を考慮し、チームAとチームBそれぞれ個別の得点結果についても分析した。その結果、チームAチームBともに、統合した得点結果と類似した得点推移を示し、統合して分析することによって互いのキャンプの成果を著しく歪ませることはないことが確認された。

以上のことから、キャンプ前からキャンプ終了1週間後にかけて全体の合計得点およびすべての下位因子において有意な向上が認められ、さらに全体の合計得点と一部の下位因子については、キャンプ終了1ヵ月後まで有意な向上が維持されていることが明らかになった。

#### IV. 考察

言語的コミュニケーション因子は、「良いところも悪いところも、互いに伝え合うこと

ができる」、「チームの課題について全員で納得するまで話し合い、解決していくことができる」などの項目で構成されている。キャンプAでは、ASEとして実施した各課題に対して時間にとられることなく取り組んでよい旨を選手たちに伝えたことにより、ひとつの課題に1時間以上の時間を費やすなど、妥協のない姿勢が目立ち、苦勞して課題を達成したときには選手同士全身で喜びを表現する様子などが見られた。また各課題に挑戦した後は、必ず十分なふりかえりの時間を設け、互いの感じたことをシェアさせながら、積極的な自己開示を促した。キャンプBでは、事前の打ち合わせの中でチームのコーチからの要望を受け、キャンプ後にチームとしてより積極的なコミュニケーションを図ることができるよう、個々人の性格なども考慮したうえでグルーピングされた少人数でのアクティビティを多く取り入れた。また、キャンプAキャンプBともに、コミュニケーション能力向上を目的に「ブラインドウォーク」を取り入れたという経緯もある。これらの要素が影響して、キャンプ前と比較してより積極的な言語的コミュニケーションが図られるようになったと考えられる。

信頼関係因子は、「1人1人が失敗をおそれずにチャレンジする」、「1人1人がチームの仲間に認めてもらえるものを持っている」、「互いに仲間の長所、短所を理解している」などの項目で構成されている。「トラストフォール」を実施した後の選手たちの感想には、「仲間を信じないと出来ない課題だった」、「自分を信じる仲間がいることに気付いた」などの記述がみられ、これを機に、選手たちの間に身体的要素をベースにした信頼関係が形成されたことがうかがえる。また、「ラインナップ」や「クモの巣」に取り組んでいる選手たちからは、相互に身体的な特徴について考え、それを活かした課題解決をしようとする姿勢が見られた。「クモの巣」終了後の選手たちの感想からは、「〇〇の意外なアイデアがすごく良かった」、「互いに体の大きさ、力などを考えながら解決していくゲームであった」といった内容が聞かれ、日頃サッカーでしか顔を合わせることがない仲間のサッカーから切り離された場面によって引き出された意外な一面に触れたり、課題解決にあたり相互理解の必要性を感じたりしていた。信頼関係を構築していくにあたり、「トラストフォール」のような身体的要素に加え、精神的要素によるアプローチが重要となるが、その際、相互理解を深めたり、他者に称賛されたりする経験が及ぼす影響は非常に大きいと考えられる。

目的達成因子の項目は、「1人1人が自分勝手なプレー・行動をしない」、「最後まであきらめない」などで構成されている。今回のキャンプで実施したASEの内容は、かなり負荷の大きなものがあり、前述の通り一部の課題に対しては、解決に1時間以上の時間を費やしていた。途中であきらめてもおかしくない状況にありながらも最終的に課題の解決に至ったことを通して達成感を味わい、最後まであきらめないでやりぬくことへの意義を感じたと推察できる。また、課題の9割を達成している状況で、最後の最後に失敗をし、振り出しに戻るといような場面も数多く経験していた。「クモの巣」や「ヘリウムフープ」を終えた選手たちの感想からは、「最初は絶対できないと思っていたけど、あきらめずにやればできた」、「ばらばらな行動をしていたせいで課題の解決に必要以上の時間を要してしまった」といった内容の記述が多々見られた。これらのことから、ASEの体験を通して得た選手たちの学びや気づきが、目的達成因子の得点向上をもたらした一因だと考えられる。

言語的コミュニケーション因子、信頼関係因子、目的達成因子の3因子の向上について

総括すると、野外炊事などの活動に代表されるキャンプ活動においても得点向上に寄与する要素が含まれていると推察されるが、グループやチーム内での葛藤や衝突がより意図的・積極的に組み込まれていた ASE での経験がより大きな影響を与えたと考えられる。また、ASE という共通の体験から得る学びや気づきを通して、チームとしての変容に至っていることが推察される。

チーム規範行動因子は、「いつも荷物をきれいにまとめて置いてある」、「誰に対しても気持ちよいあいさつができる」などの項目で構成されている。子どもの「生きる力」を測定するために橘・平野<sup>(7)</sup>が作成した IKR 評定用紙には、「身のまわりの片づけや掃除ができる」や「だれにでも、あいさつができる」などの項目があり、チーム規範行動因子の項目と極めて類似しているものがある。これまでに、IKR 評定用紙を用いたキャンプ活動における調査・研究が行われており、その中でキャンプ活動は子どもの「生きる力」に寄与するという報告が数多くされている。このことから、チーム規範行動因子によって測られる内容は、全人的な教育を目指すキャンプ活動から得られる基本的成果といえる。チーム規範行動因子の有意な向上については、キャンプを通して寝食を共にし、規律ある共同生活をしたことが大きく影響していると考えられ、チームの雰囲気向上において、ASE だけでは補いきれない成果をキャンプ活動がフォローする形になったと推察される。

また本研究において、キャンプ終了1ヵ月後まで全体の合計得点および言語的コミュニケーション因子、チーム規範行動因子の向上が維持されていた要因として、チームを指導しているコーチがキャンプに同行し、選手たちの気づきや変容過程を直に観察することで、キャンプ終了後にその様子を同行できなかったコーチに対して的確にフィードバックできた点、選手たちがキャンプ中に得た学びや気づきを大切にし、キャンプ後においてもそれをベースとしたトレーニングを心掛けることが可能であった点が挙げられる。実際に、チーム A からは「今までコーチ主導で行っていたミーティングを選手主導に切り替えてみた」「キャンプ中に思わぬリーダーシップを発揮した選手を、次の試合のキャプテンに任命してみた」、チーム B からは「キャンプというサッカーとは切り離された時間での行動や態度が、サッカーのプレーに直結している可能性に気付いた選手たちの感想をコーチが上手に拾い、キャンプ後もその気づきを風化させないように折りをみて選手たちに問いかけている」など、キャンプ後においても選手たちがキャンプ中に得た学びや気づきを大切にできたという報告を受けている。全体の合計得点および言語的コミュニケーション因子、チーム規範行動因子のキャンプ後における向上の維持については、上記のようなコーチの行動・態度が一要因として考えられる。福富は、サッカーチームにキャンプを実施する上で、キャンプスタッフとサッカーのコーチが有機的な連携を図り、情報を共有していき、キャンプ終了後もキャンプでの選手の学びや気づきを尊重したサッカー指導を展開していくことが有効であることを報告している<sup>(1)(8)</sup>。このことから、本研究で対象としたキャンプのように、キャンプ終了後においても同集団にて活動が展開され、かつキャンプ中の様子について熟知している指導者がその後のキャンパーに対してキャンプでの成果の維持・向上のために継続的に介入をすることによって、キャンパーの一層の成長を促すことが可能になると考えられる。本研究では、2つの因子においてキャンプ終了1ヵ月後まで得点の向上が維持されていなかったが、いかにしてキャンプ中に得た学びや気づきを風化させず、その後の生活に取り込んでいくことができるかがキャンプ活動の鍵であるといえる。

## V. 結論

本研究では、サッカーチームが ASE を取り入れたキャンプ活動を体験することによってチームの雰囲気が良くなることが明らかとなった。さらに、チームの雰囲気が良化されるまでのプロセスとして、コミュニケーションの深化や信頼関係の構築、チーム規範行動の改善など、様々な個人やチームの変容が起こっていることが明らかになった。また、キャンプの成果を維持していくために、キャンプ後においてもキャンプ中の選手たちの様子を加味したコーチの適切な働きかけの重要性も示唆された。今後、野外教育活動がチームビルディングの一翼を担う可能性を広げるためにも、野外教育の分野がチームビルディングの分野と密に連携を図り、年齢やチームの発達状況に応じたプログラムの検討をしていく必要がある。

## 引用文献、参考文献、注

- (1) 福富信也、「キャンプ経験がサッカーのチームワークに及ぼす影響」、信州大学大学院教育学研究科平成16年度修士論文、2005
- (2) 高瀬宏樹、「サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ～10年の軌跡～」、キャンプ研究、第11巻第1号、2007、pp. 48-49
- (3) 鶴川高司、「いま一度“アイスブレイキング”について考える」、野外教育情報 18、日本教育科学研究所、2010、pp. 64-71
- (4) 福富信也・平野吉直、「キャンプ経験がサッカーチームのパフォーマンスに及ぼす影響～off the pitchでの選手の行動変容から～」、日本野外教育学会第7回大会プログラム・研究発表抄録集、2004、pp. 90-91
- (5) 福富信也・平野吉直、「キャンプ経験がサッカーチームのパフォーマンスに及ぼす影響(2)」、日本野外教育学会第8回大会プログラム・研究発表抄録集、2005、pp. 42-43
- (6) 金子優誠、「チーム内の雰囲気と触球数とのかかわりに関する一考察」、教育実践研究、第20集、2010、pp. 163-168
- (7) 橘直隆・平野吉直、「生きる力を構成する指標」、野外教育研究、第4巻第2号、2001、pp. 11-16
- (8) 福富信也・平野吉直、「キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響」、キャンプ研究、第8巻第2号、2005、pp. 11-16